

第2章：認知からみた言語習得

➤ はじめに

McLaughlin(1987)…第二言語習得を「複雑な認知技能の習得」としてとらえる。

⇒第二言語を身につけることはその運用を支える言語知識を習得するという点で認知的な過程であり、その運用を流暢に行うために知識の技能的な面を習得しなければならないという点で技能的である。

⇒言語知識の習得には手続き的な知識を身につけることも含まれる。

⇒技能的な面の習得では言語運用を構成する様々な下位技能を自動化し、それらを統合することも行われる。

➤ 1. 言語知識と処理

(1)知識－統制モデル

Bialystok&Sharwood Smith(1985)は第二言語の運用と習得過程を説明できる中間言語のモデルとして知識－統制モデルを提示。

言語知識の体系…学習者が身につけた目標言語の言語規則体系の知識(言語の辞書)

処理体系…その知識にアクセスし使用場面に応じて必要なものを能率的に引き出す統制的手続き(辞書の引き出し方)

◆第二言語の習熟度を3つの観点から考える

1)言語知識における違い→量的な面か質的な面か

2)言語知識にアクセスする手続きにおける違い→手続きを遂行する能率性と速さ

3)上の両者によるちがい

(2) 統制的処理と自動的処理

・統制的処理…処理過程に注意を払いながら行われる。十分に学ばれていない項目を処理する場合に現れる。この処理はワーキングメモリ(作業記憶)で行われその容量を消費するため一度に1つしか処理できない。

・自動的処理…適切な脈絡によって引き起こされ自動的に機能する。十分に学ばれて長期記憶の中に貯蔵されている項目に直接アクセスできる。ワーキングメモリを消費しないため同時に並行した処理を行うことができる

(3) 自動化

McLaughlin, Rossman&Mclead(1983)の理論

- ・自動的処理は長期記憶の中における連結的統合に頼って行われる。
- ・言語技能の統制的処理→自動化
→練習を重ねる(大量のインプットを得る)ことで無意識にできるようになり自動化する

Logan(1988)の理論

- ・事例理論(instance theory)…自動化は統制的処理を経験することなく長期記憶に蓄積されている事例に直接アクセスしそれを想起することで行われる。

➤ 2. 言語知識の種類

(1) 顕在的知識と潜在的知識

①顕在的な言語知識…意識的に把握することができことばで説明できる知識

ex)教室における形式指導

②潜在的な言語知識…意識的に把握することのできない直感的な知識

ex)自然な環境で自ずと身に付くもの、母語の言語運用

Krashen(1982)の理論

- ・言語規則に対して意識的に注意を払いながらそれを理解し記憶する「学習」→①
- ・無意識的に自ずと言語規則が身に付く「習得」→②
習得学習仮説…言語能力は無意識的に習得されたときに獲得できるものであるとし、意識的な学習では言語能力は獲得できないとした。

- ・非インターフェイス

現在ではインターフェイスの立場が主流

顕在的知識→潜在的知識へと変化する強いインターフェイス

顕在的知識が間接的に潜在的知識の育成を補助する弱いインターフェイス

(2) 宣言的知識と手続的知識

Anderson(1983)…宣言的知識から手続的知識を導くことが発達の過程だと主張

- ・宣言的知識…事実や事物についての知識、静的意識的でことばで説明可能
- ・手続的知識…技能遂行に関わる知識、直観的で言葉で説明は不可能

→一連のことが無意識にできる

発達過程の3段階

1) 宣言的段階

身につけた宣言的知識にアクセスしそれを解釈しながらなんとか行動につなぐ段階。処理に時間がかかり効率が悪い。

2) 編集的段階

宣言的知識を行動において直接的に適用できるようにするための手続を知識と

して構築する段階。能率性が高い。

3) 同調的段階

課題の達成にもっとも適した手続を選択できる選択性の改善とそれに伴う処理時間の短縮が実現される段階。

(3) 事例的知識と規則的知識

- ・事例的知識…丸ごとの定式的な表現項目として処理され記憶されている知識。記憶システムが大きいが分析的処理がないためアクセスしやすい。

Ex) for the first time, by the way, I agree... I think... have a nice day etc

これらは表現を一つのかたまりとしてとらえられており、チャンクとして脳内からすぐに引き出すことは可能だがほかと結合するのに時間がかかる。

- ・規則的知識…構造的な分析処理を伴いながら行われる表出や理解において利用される言語規則の体系的な知識。新しい場面には対応できるが処理に時間がかかる。

Skehan(1998)…上記二つを二重様態システムとし、流暢な言語運用を行うためには両者が必要であると主張。

(4) 言語知識の相互関係

母語

⇒事例的知識…潜在的で自動化されている

規則的知識…潜在的で手続化されていて処理も自動化されている。

第二言語習得では習得は潜在化・手続化・自動化の3つの方向で進む。

事例的知識…顕在的統制的段階から潜在化し自動化する。

規則的知識…顕在的宣言的段階から手続化と合成をして手続的知識として潜在化させ、その処理も自動化することが必要。

[考察]

この章では言語知識の習得には手続的知識が必要であるということが述べられていた。この手続的知識で重要となるのが自動化である。この自動化とは何回も練習を重ねることで自然と言語が習得されるということであるが、実際に教室でも授業で大量のインプットを学習者に与えることが重要となってくると思う。さらにインプットされた知識を使えるように何度も何度もアウトプットしていくことも必要であろう。しかし果たして第二言語(EFL)としての英語を学んでいる教室環境で本当の習得が果たせるのかというところが疑問である。留学して外国語に毎日触れるとでもなれば習得が果たせるのかもしれないが意識していないと学べないような日本ではたしかに習得は難しいのかもしれない。もっとも習得の基準をどこに置くかが問題であると思う。いずれにせよ適切にインプットを与えることは今後さらに重要になってくると考えられる。

[練習問題]

(1) 事例的知識を構成する項目は語彙的成句とも呼ばれるが、その理由は何か。

事例的知識は丸ごとの定式的な表現項目として処理され記憶されているものである。具体的なものとしては英語で **for the first time**, **by the way**, **have a nice day** といった表現を1つのチャンクとしてとらえるような語である。人間の記憶の脳内には断片的でかたまりとなっていてすぐに引き出せる成句的な語が多くある。日常での言語知識は主に事例的知識に頼っている場合が多い。というのも事例的知識の中の成句的表現を多く覚えていればいほどコミュニケーションが可能になるからである。したがって事例的知識は語彙的成句と呼ばれているのである。

応用言語学特講

第2章後半部(3節・4節・5節)

報告者：S.K

3. 言語知識の習得と流暢さ

(1) 文法への意識昂揚と気づき

第二言語の指導において、文法への意識昂揚(*consciousness-raising*)を行うことの意義が唱えられている。文法への意識昂揚は、第二言語の知識の発達を促進するという見通しのもとに、目標言語の形式的特徴に対して意図的に学習者の意識を向けることと定義される(Sharwood Smith, 1991)。

伝統的な文法指導と意識昂揚には次のような違いがある(Rutherford, 1987)。

伝統的な文法指導：文法を教師の側から学習者へ教え込むという前提があり、その達成が目標となる。

意識昂揚：学習主体は学習者自身であるという基本認識に立つと同時に、文法への意識昂揚は言語習得のための補助ないしは手段であり、目標そのものではない。

文法への意識昂揚は、目標である手続的知識の習得へ至るための補助的な手段として、形式へ注意を向ける行為であるといえることができる。

第二言語習得研究ではインプット(input)とインテイク(intake)を区別する(Corder, 1967)。インプットは学習者が受け取る目標言語の発話や文の総体を意味するが、インテイクはそのうちで学習者が目標言語の習得のために利用できる部分、つまり自らの中間言語体系の中へ取り込むことのできる状態にある部分を指す。

インテイクをするためには、“気づき”が必要である。

(2) インプット処理

文法への意識昂揚と気づきに類似した考え方として、インプット処理(input processing)と呼ばれるものがある(VanPatten & Cadierno, 1993)。インプットの意味理解は、その意味を表している形式を無視しても、状況的な脈絡に頼ることによって可能となる場合もあるが、インプット処理においては、形式との関連づけを行う中で意味の理解が行われる。

(インプット) 処理指導(*processing instruction*)

インプット処理を意図的に課すことによって第二言語習得を促進しようとする方法。これには次の2つの段階が含まれる。

1. 目標となる文法形式とそれが表す意味との関係について説明を行う。
2. その形式を含んでいるインプットの処理、つまり意味理解を集中的に経験させる。

このように文法的な説明から理解練習(comprehension practice)へと移る方法は、文法的な説明から表出練習(production practice)へと進む伝統的なやり方と対称をなすことに注意する必要がある。文法的な説明を与えるだけでは手続的知識は育成されないが、処理指導においては、表出練習に先だって、インプット処理という理解を通じた練習によって必要な手続的知識の育成をはかるので、理にかなった発達過程を踏むことになる。

(3) 言語知識の再構成と処理可能性理論

第二言語習得における発達は、その中間言語体系の発達とみることができる。事例的知識と規則的知識がこの体系を構成している。規則的知識の発達については、量的な変化に質的な変化が伴う。この意味における質的な変化を、中間言語体系の**再構成(restructuring)**と呼ぶ。

新しい規則の習得は、量的な増加となるだけでなく、既存の規則体系の中へこれを組み込み、体系化する過程を伴う。この意味において、新しい規則の習得はその体系化の過程である(McLaughlin, 1990)。

宣言的知識と手続的知識の区別で、前者から後者を導く編集的段階において行われる手続化と合成という 2 つの過程があるが、このうちの後者の過程を再構成の過程を含むものとしてみることができる。

教授可能性仮説(the Teachability Hypothesis)

教える側から意図的に行われる働きかけのような外からの働きかけとしての形式指導が効果を持たない場合がある。この事実は Pienemann(1984)の実験研究によって確認され、次のように定式化される(Pienemann, 1998)。

- 1) 形式指導を行っても習得の段階を飛ばすことはできない。
- 2) 形式指導が効果を持つのは、目標となる構造が学習者のすでに到達している段階のその次の段階に該当するときだけに限られる。

教授可能性仮説は、顕在的で宣言的な言語知識ではなく、潜在的で手続的な言語知識において当てはまる仮説であるということが注意点である。

処理可能性理論(the Processability Theory)

ある文法項目の宣言的知識を基にして遂行的な手続的知識を育成するためには、その項目の文法構造を処理する能力がなくてはならないことを規定する。

これによると、一連の発達順序を構成する個々の文法項目は、それぞれお互いに発達の含意的関係(implicational relationship)を保っており、それぞれの段階はその前の段階の処理ができるようになっていることを前提とする関係が成立している。

(4) 流暢さ

第二言語の運用における流暢さ(fluency)を、発話の表出に関わる処理過程の容易さと速さの問題として把握すると、その達成を次の 3 つの観点から考察することができる(Schmidt, 1992)。

- 1) 処理に伴う注意量の減少化
- 2) 処理手続きの効率化
- 3) 長期記憶への直接的アクセス化

このように、第二言語の使用における流暢さを考える際には、処理そのものの迅速化、処理手続きの能率化、および事例的知識への直接的アクセスの 3 つの面を考慮に入れる必要がある。

4. 学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー

(1) 学習ストラテジー

言語学習は個々人において行われるが、個々人はそれぞれ自分なりの方法で学習に当たっていると考えられる。個々人が言語学習においてそれを促進すべく用いている方法を学習ストラテジー(learning strategy)と呼ぶ。

学習ストラテジーの分類法の 1 つとして O'Malley & Chamot (1990)をあげることができる。この分類では次の 3 つの種類が区別される。

- 1) メタ認知的ストラテジー：自分の認知的過程に対して自らが自覚的になるためのストラテジー。
- 2) 認知的ストラテジー：学習において入ってくる情報に直接的に働きかけ、学習効果を高めるためにそれを操作するストラテジー。
- 3) 社会的／情意的ストラテジー：他の学習者や母語話者と交流するために選ぶストラテジー。

第二言語における学習ストラテジーの研究は、良い学習者が用いているストラテジーを確認することと、学習ストラテジーの使用と熟達度の関係を探ることで行われる。

Rubin(1975)による良い学習者の分析を端緒とする一連の学習ストラテジーに関する研究によって、次の 5 点が確認された(Ellis, 1994)。

- 1) 良い学習者は言語形式に注意を向ける。
- 2) 良い学習者はコミュニケーションに向けた練習を重視する。
- 3) 良い学習者は学習課題に対して積極的にアプローチする。
- 4) 良い学習者は学習過程に対して自覚的である。
- 5) 良い学習者はストラテジーを課題に合わせて柔軟に使用する。

学習ストラテジー研究のもう 1 つの視点は、学習者に効果的な学習ストラテジーの用い方を指導することと、それが熟達度に及ぼす影響を調べることである。

(2) コミュニケーション・ストラテジー

コミュニケーション・ストラテジー(communication strategy)とは、言語学習者が自分の中間言語が不十分なために生じるコミュニケーション上の問題に対処するために用いるストラテジーのことを意味する。

もっとも初期に提示され、今でも1つの基準となっている Tarone(1977)のモデルは、次の5つのストラテジーを大別し、それぞれに下位ストラテジーを設けている。

- 1) 回避(avoidance)
 - a. 話題回避
 - b. 伝達放棄
- 2) 言い替え(paraphrase)
 - a. 近似代用
 - b. 造語
 - c. 遠回し表現
- 3) 意識的転移(conscious transfer)
 - a. 直訳
 - b. 言語切替
- 4) 援助訴え(appeal for assistance)
- 5) 身振り表現(mime)

コミュニケーション・ストラテジーの使用を指導することの効果を調べることも、コミュニケーション・ストラテジーを研究する1つの視点である。

5. 今後の課題と展望

認知からみた第二言語習得研究においては、認知的なメカニズムを研究の対象とする。次の5つの大きな研究テーマを言語教育とどのように関連づけることができるかが課題となる。

- 1) 手続的知識と宣言的知識の区別
- 2) 言語知識の再構成
- 3) 処理技能の自動化
- 4) 事例的知識と規則的知識の区別
- 5) 学習ストラテジーの意義と役割

第二言語の運用力が十分に身につけていないと判定された場合、この認知的な見方によれば、その原因を検討するための具体的な視点として次の5つを与えてくれる。この点において、認知的アプローチは貴重で有意義な研究視点を提供する。

- 1) 手続化を通じた手続的知識が十分に育っているかどうか
- 2) 手続化と合成を通して知識のシステム化が十分にされているかどうか
- 3) 処理技能の自動化は十分になされているかどうか
- 4) 事例的知識の蓄積は十分であるかどうか

- 5) 良い学習ストラテジーを所持し適切に使用しているかどうか

基本問題

(2) 自動的処理は長期記憶の中における永続的な連合的結合に頼って行われるので、自動的処理を十分に発達させるためには、そのような結合を形成するためのかなりの量の練習が必要である。言語技能は統制的処理の段階として始まり、練習を重ねることによって、それが徐々に自動化されることになる。自動化の過程は注意量の減少の過程として把握される。この考え方とは異なった見方もあり、その理論では、処理の結果をその事例として長期記憶に確立し、それを直接的に想起できるようになる過程として自動化を把握する。

宣言的知識を行動において直接的に適用できるようにするための手続きを知識として構築する編集的段階で、宣言的知識へそのたびごとにアクセスすることを不要にする手続きを作り上げることを手続化という。

考察

『日本人が好む英語学習方略—高橋五郎著「最新英語教習法」を読む—』(多田洋子)によると、細分化されたストラテジーの中で学習者がどの学習ストラテジーを選択するかは、様々な要因に左右されると言われている。その中の要因のひとつとして、文化的背景があり、欧米文化圏とアジア文化圏との差異が報告されているとある。

教科書の第2章で良い学習者について5つのことが述べられていたが、どの文化圏に所属しているかということも、この5つのポイントと関連しているのではないかと思う。アジア文化圏では記憶を重視する傾向にあると言われており、アジア人がより暗記を好むことに関しては複数の先行研究があるとされているが、このことを踏まえると、“良い学習者はコミュニケーションに向けた練習を重視する”という点は欧米文化圏の人々のほうが優れているのではないかと思う。

第2章の後半部分ではインプット処理や処理可能性理論などについて述べられており、言語知識をどのように処理し習得につなげていくかということに関して、様々な過程があるのだと分かった。また、インプットとインテイクを区別するという点は、とても重要だと思った。